

## 第4回大阪府学校教育審議会商業教育部会 概要

1 日時 令和8年5月12日（火）13時07分から14時45分

2 場所 大阪府公館「大サロン」（大阪府中央区大手前2丁目1-46）

### 3 出席委員

氏名	職名	備考
林 永 周	立命館大学 経営学部 教授	
大 継 章 嘉	大阪教育大学 総合教育系 高度教職開発部門 特任教授	部会長
小 林 幸 治	大阪商工会議所 人材開発部 部長	
中 川 慧	大阪公立大学 経営学研究科 教授	部会長代理
フォーリー 淳子	大同門株式会社 代表取締役社長	

### 4 内容

- ・今後の府立商業系高等学校のあり方について  
「まとめ」

### 5 審議会概要

#### (1) 審議

- 事務局から資料1「第3回大阪府学校教育審議会商業教育部会意見概要」、「新たな商業教育における学びの方向性（第3回商業教育部会におけるご意見を踏まえたイメージ（案））」及び「大阪府教育委員会会議への経過報告」について説明。
- 部会長から出席委員に対し、大阪府の商業教育において育む人物像・商業教育で育むべき資質能力に追加すべき文言について異議がないか確認し、出席委員が承認。
- 事務局から資料2「大阪府学校教育審議会商業教育部会報告案」について説明。
- 部会長から章ごとに異議がないか確認し、出席委員より以下発言。

#### <中川委員>

- 新たな商業教育を実際に実施していくにあたり、保護者への説明の重要性が指摘されてきたが、従来の教育手法とは大きく異なるため、単に「何を行うか」ではなく、「どのような魅力があり、どのような特色を持つ教育であるのか」を丁寧に伝えていく必要があると感じている。

- また、特に重要になるのは、スモールサイクル型のカリキュラムを回していく教員のスキルや専門性であり、教員の力量が極めて大きなポイントになると考える。
- 大学や産業界との連携が不可欠であることを踏まえると、すべての商業高校で、誰もが同じ水準で実施することは現実的に難しいのではないかという印象を持っている。
- また、今後少子化の影響により生徒数がさらに減少する状況を踏まえると、教育資源の使い方がこれまで以上に問われることになることから、生徒に対して限られた教育資源を効率的かつ集中的に活用することによって実行可能な体制を整え、新たな教育スタイルを構築していく必要があると考える。

#### <大継部会長>

- 私の経験に基づく話であるが、かつて大阪市立に在籍していた当時の事例として、本日の資料にも示されている4校のうちの一つである大阪ビジネスフロンティア高等学校について述べたい。
- 同校は平成24年に開校し、当時の商業高校にはなかった新しいビジネス教育と専門英語を学ぶ「グローバルビジネス科」を設置した点に大きな特色がある。
- この学校では高大接続を意識した7年間の教育を視野に入れ、接続教育を通じてビジネス分野のスペシャリストを育成することを目的としていたが、その背景には、大阪市立東商業高等学校、市岡商業高等学校、天王寺商業高等学校という三つの商業高校を統合し、教育資源を集約することによって魅力化を図るという狙いがあった。
- 現在も同校では、高大7年間を意識した教育が継続的に実施されており、複数の大学と連携関係を構築しながら教育を進めていると伺っているが、その成果については大学側からも高く評価されていると聞いている。
- これは一つの好事例であると考えており、少子化が進行するという現状を踏まえれば、本部会で議論してきた新たな商業教育の学びを確実に実施していくためには、委員からの指摘にもあるとおり、教育資源を効果的に集約し、生徒がより充実した学びを行うことができる学校づくりを進めていくことが重要である。

#### <フォーリー委員>

- 今回、中川委員がおっしゃったとおり、非常に新しい試みを進める際には、既存のシステム、いわゆるレガシーシステムとの間で摩擦が生じることが多いと考えている。
- これはビジネスの文脈においても同様であり、新しいことに挑戦しようとする、既存の組織や仕組みとのハレーションが避けられないという現実がある。
- 特に新規事業の考え方としてよく言われるのは、「新規事業は既存組織の中で進めるとうまくいかない」という一種の鉄則であり、新しい取り組みを行う際には、スモールチームを編制し、合議制ではなく、一つの明確な目標に対して集中と選択を行いながら進めていくことが重要であると考えている。
- また、大きな構想を描き、それをウォーターフォール型で一気に進めていく手法は、VUCAとも言われる現在の不確実で流動的な時代、さらにはAIが年ごとに大きく様変わりしていく状況には適していない。

- したがって、スモールチームによってアジャイルに取り組み、状況の変化に応じて、昨日決めた方針であっても必要に応じて修正することを前提とした柔軟な姿勢が求められる。
- そのような考え方のもとで、「世界で活躍し、価値を生み出し続ける学生を輩出する」という一つの明確な目標に向かって学校づくりを進めていくことに大きな期待を寄せている。
- 加えて、今回の報告資料は全体として非常に丁寧に、かつ詳細にまとめられていると感じているが、一点、用語の観点から述べると、「イノベーション」という言葉がやや控えめである印象を受けた。
- 価値創造や国際的に通用する取り組みを進めていく上では、まさにイノベーションを起こし、新たな価値を創造するという視点が必要であるため、報告案に「イノベーション」という言葉を記載いただけると、趣旨がより明確になるのではないかと考えている。

#### <事務局>

- 学校教育審議会の本審に報告案を提出するにあたり、当該内容については文言の追記を行いたいと考えている。
- また、部会長とも相談のうえ、どの箇所に盛り込むのが適切かを整理してまいる。

#### <中川委員>

- もう一点として、高大連携に関し、大学側の視点を踏まえた連携の在り方について述べたい。
- 先ほどフォーリー委員からも指摘があったとおり、既存の高大接続とは異なる枠組みで検討する必要があると考えている。
- その観点から、先ほど大継部会長から言及のあった大阪ビジネスフロンティア高等学校との立て付けの違い、すなわち同じ高大接続であっても、どのような点に違いがあり、どのように位置づけるのかを明確にしていく必要があるのではないかと感じている。
- 大阪ビジネスフロンティア高等学校は複数の大学と連携していると伺っているが、審議してきた商業教育においては、連携先をある程度集約し、特定の大学と重点的に連携する形を取ることができれば、受け入れる大学側にとっても取り組みやすくなる可能性があると考えます。
- また、高大連携は生徒のみを対象とするものにとどまらず、教員側の関与も重要である。
- 教員自身が大学と関わりを持つことで、専門性や指導力の向上につながるほか、「問い」とは何か、「研究」とは何か、「ゼミ」とは何かといった大学教育の要素を実体験として理解する機会になると考えられる。
- そのため、生徒だけでなく教員も高大連携の一環として参画できるような枠組みを設けることは、有意義ではないかと考える。
- 社会人大学院をはじめ、学び直しの場は各所で整備されており、そのような場は非常に有効な学習環境になると考えている。

- 私自身が関わっている CSV 経営研究プログラムも、社会人を主な対象としたプログラムであり、学び直しを通じて、社会価値と経済価値をいかに連携させるかというテーマを学ぶ内容となっている。
- これはどちらかといえばアカデミックな観点のプログラムであるが、このような取り組みを活用して学びを深め、その過程を生徒に示すことは、自らが実践していることの証ともなり、教育的な説得力を持つものになると考えている。

#### <林委員>

- 先程の話にあった商業系高校の3校を集約してはどうかとの意見については、概ね合意しており、少子化という社会的課題を踏まえれば、3校をどのように扱うかについて統合という選択肢を検討すべきであるという意見に私自身も同意している。
- その理由は、3校がそれぞれ独自の特色を発揮しながら教育を行ってきたものの、その取り組みが一定の限界に達している状況にあると認識している。
- 今こそ再構築の段階に入っていると考えられ、資源の再配置、すなわち選択と集中を図り、分散していた教育資源を統合・再構築することによって、新たな価値を創出する局面に来ているのではないかと考えている。
- 現在取り組もうとしているのは、新しい価値を生み出すための教育の仕組みそのものを刷新する試みであり、その過程では、誰と、どのように学生を育てていくのかという点が極めて重要になる。
- 従来の枠組みに固執するのではなく、社会とどのように調和しながら、将来に向けて子どもたちが円滑に社会へ移行できるような教育の在り方を考え続ける必要があると考える。
- 教育資源を分散させたまま維持するのではなく、統合によって資源を集中させ、新しい分野や新しい学びへ投入していくことが重要である。
- また、大学や産業界との多様な連携を視野に入れるのであれば、個別最適だけでなく、全体最適の観点も併せて検討しなければならず、学校内に閉じたカリキュラムではなく、社会と接続し、社会全体との調和を意識したカリキュラムを構築する必要がある。
- そのためには、さまざまな主体をつなぐコーディネーターやゲートウェイとなる人材を適切に配置することも欠かせないと思う。
- さらに、グローバルな視点を重視するのであれば、教育の魅力が国内外に伝わり、その結果として海外からの学生が関心を持ち、入学を希望する可能性についても視野に入れた議論が必要である。
- 優れた教育を提供した結果として、海外から学生が集まることも想定される以上、そのような状況にどのように対応するのかについても、あらかじめ検討しておくべきであると思う。

#### <大継部会長>

- 本部会においては、AI 技術の急速な進展、とりわけ近年の報道でも指摘されている社会的影響の大きさを背景に、2040 年以降の就業構造の変化や、文部科学省が示しているグ

ランドデザインを視野に入れつつ、商業系高校が抱える課題を整理し、今後の商業教育の在り方について審議を進めてきた。

- 委員の皆様から頂戴したご意見は共通して、新たな商業教育を本格的かつ継続的に展開するためには、従来型の商業教育の単なる延長では不十分であり、教育内容と体制の両面において、より集中的かつ戦略的な取り組み、すなわち教育資源の選択と集中が不可欠であるという点に集約されると考えている。
- 特に、実践を通じて学ぶスモールサイクル型カリキュラムの実施、大学や産業界との継続的な連携、教員の専門性やファシリテーション能力の向上といった取り組みは、一定の教育資源と推進体制を前提とするものであり、すべての学校で同一水準に実施することには現実的な制約があるのではないかというご意見が示された。
- また、少子化の進行という社会的背景を踏まえれば、新しい商業教育を確実に実装し、生徒にとって質の高い学びを提供するためには、限られた教育資源を効果的に集約し、魅力化や特色化を明確にした学校づくりを進めていく必要があるとの提案がなされた。
- 大阪ビジネスフロンティア高校の事例は一つのモデルとして参考になるが、それとは異なる新たな形をどのように構築していくかも重要な課題であるとの指摘もあった。
- さらに、企業活動や高大接続といった観点からも、新たな商業教育を推進するにあたっては、既存の枠組みにとらわれず、人的・物的資源を集中的に投入するとともに、外部専門人材やコーディネーターを配置し、機動力のある運営体制を構築することが重要であるとのご意見を頂戴している。
- 加えて、現在三校で実施されている商品開発、アントレプレナーシップ教育、観光教育といった取り組みについては、それぞれを融合・高度化することにより、より実践的なビジネス人材の育成につながるとの見解も示された。
- あわせて、2040年に向けた就業構造推計では事務職の供給過多が想定される一方で、高い専門性を有する人材の必要性が一層高まるとの指摘もあり、この点については現在も取り組みを進めているところであるが、商工会議所の立場からのご意見があれば、ぜひお聞かせいただきたい。

#### <小林委員>

- 本題に入る前に一点補足として述べたい。
- 先ほど高校教員の研修に関して、大学におけるCSV経営研究プログラムの話があったが、大阪商工会議所においても経営者や幹部層を対象とした研修を実施しており、こうした研修に教員が参加することで、企業経営者や幹部がどのような点に関心を持ち、どのような視点で意思決定を行っているのかを学ぶ貴重な機会になるのではないかと考えている。
- PRとなり恐縮であるが、教育と産業の相互理解を深める一つ的手段として意義があると思われる。
- 次に、部会長から言及のあったAIの進展によって事務職が減少していくという点については、基本的に同意する一方で、事務職に従事する人材が完全に不要になるわけではないとも考えている。

- むしろ、高度な能力や専門性を備えた人材が、より強く求められる時代になっていくという部会長の指摘は的確であり、その観点から本部会でも新たな商業教育のあり方を検討してきたものである。
- したがって、これまで商業高校が担ってきた教育が全く意味がなかったとは考えておらず、特に検定試験等を通じて体系的に知識や技能を身につけるといった従来の取り組みには一定の意義があったと考えている。
- 今後においても、AI や DX によって生成・分析された数値やデータが示された際に、それを会計的・経営的な視点から妥当性を判断し、さらには新たな価値創出につなげていくことのできる人材は必要である。
- そうした意味で、本部会で議論してきた探究型プログラムは非常に有効である一方、高校生にとって相当程度負荷の高い学習内容となる可能性もあり、探究的学びと資格取得を同時に高い水準で両立させることは、現実には難しい場面も想定される。
- そのような中で、今回議論対象としている4校ないし3校の商業高校だけでなく、府内には他にも商業教育を実施している高校があると認識しており、そうした学校において、資格取得や商業分野の専門性をより重視した人材育成を担うという役割分担も、教育全体としては必要ではないかと考える。

#### <事務局>

- 本日晒している資料の通算 17 ページには、商業に関する学科を設置する学校として、今回の審議対象である4校に加え、昼夜間単位制の大阪府立中央高等学校にビジネス科があることを記載している。
- 全日制ではないが、ビジネス分野の学びを行っている学校として、多様な学習形態を提供している点は注目すべきであり、このような事例も含めて、今後さらに検討を深めていきたいと考えている。

<部会長より本日審議した内容について、部会長と事務局で報告案に記載する内容を整理し、各委員にメール送付のうえ確認いただくこと、6月の学校教育審議会本審に報告することについて確認し出席委員が承認。>

#### <部会長の指名により4回の部会全体を通じた意見について聴取>

##### <フォーリー委員>

- 学校に行くのが嫌だと感じつつも、友人に会えるから楽しいという理由で登校していたとおっしゃる方は、結構多いのではないかと考えている。
- そのような中で、ある時ふと学びそのものの楽しさに気づき、新しいことを学ぶことが楽しくて仕方がなくなる瞬間があり、そのとき学生の潜在的な能力が大きく開花することがあると感じている。
- 今回、このような形で報告をまとめる機会に関わらせていただいたからこそ、ぜひそのような学びの楽しさへの気づきがあるような高校を作っていただければと強く思う。
- 学生自身が学びの楽しさに気づき、自発的に学びを深めていくことのできる環境である。

- そのためには、知識を詰め込み過ぎて硬直した教育ではなく、新しい価値やイノベーションを生み出す人材が育っていける自由闊達な雰囲気への創出が必要だと思い、その点を強く願っている次第である。

#### <林委員>

- 少子化というテーマはどうしてもネガティブな議論になりがちであるが、必ずしもそのように捉える必要はないと考えている。
- 人口が減少していく中においても、これまで蓄積してきた教育資源や人材を有効に活用し、付加価値の高い研究や学びを生み出せる仕組みとして再構築していくことは十分に可能である。
- 単に「人数が減るから厳しい」という発想ではなく、一人ひとりの生産性や創造性を高め、これからの社会を生き抜く力を備えた学生を育成していくという文脈で議論を進めることが重要であると考えている。
- このような観点に立てば、少子化そのものをネガティブに捉えるのではなく、教育の質を高める契機として前向きに捉えることも可能であると考えている。

#### <中川委員>

- 現時点における AI は、基本的に人間が書いたテキストを大量に学習することによって知的に振る舞っている存在であり、現在までに公開されてきた人間のテキストをほぼ学習し終えた状態にあると言える。
- この枠組みのままで、今以上に飛躍的に賢くなることは、基本的には難しいのではないかと考えている。
- では、その限界を超えるために何が必要かという、まさに今後取り組もうとしているように、AI が実世界に干渉し、現実空間の中でスモールステップを刻みながら学習していくことであると考えている。
- 現在の AI は、あくまで言語の世界、すなわち「次に来る単語は何か」という次元で振る舞っているに過ぎず、実体験を持たないため、例えば日本地図を書けと言われても、日本という空間を身体的・感覚的に理解していない以上、正確に表現することは難しい。
- しかし、仮に AI が我々の世界に実際に存在し、こちらから問いかけるだけではなく、AI 自身が何らかの行動を起こし、その結果に対するフィードバックを受け取りながらスモールステップで学習を重ねていくようになれば、非常に大きな変化が起こる可能性がある。
- そうなった場合、現在人間が担っている多くの学習や実践のプロセスそのものを AI が行う時代が訪れるかもしれない、そのときには「働くとは何か」「生産性とは何か」といった概念そのものを、改めて問い直す必要が生じる可能性もある。
- そうした段階に至ったときにどのように社会を設計するのかについては、また改めて考えていくべき課題であると考えている。

#### <小林委員>

- 冒頭にフォーリー委員がおっしゃったとおり、学校が楽しく、ワクワクする場であることは極めて重要であると考えている。
- その好例として、昨年開催された大阪・関西万博が挙げられる。
- 私自身、中学生や高校生が参加する複数のプロジェクトに関わったが、参加した生徒たちは皆、生き生きとした表情を見せており、非常に印象的であった。
- 「大変だっただろう」と声をかけると、「本当に大変だった」と答えるものの、その表情はどこか誇らしげであり、大変さと同時に大きな達成感や自信を得ている様子が見えがえた。
- このような経験を経た大阪であるからこそ、高校の現場においても、学習そのものは決して容易ではないとしても、その「大変さ」が「楽しい」「ワクワクする」と感じられる教育環境を実現できれば望ましいと強く感じている。

#### <大継部会長>

- 長年にわたり大阪の産業界に関わってこられた委員からのお話を伺い、大阪という地域が歴史に裏打ちされた大きな熱量を持つ都市であることを改めて感じた。
- 大阪で学ぶ子どもたちには、そうした熱量や精神をしっかりと受け継いでほしいと考えており、それが豊かな学びにつながっていくものと思っている。
- 各委員には無理をお願いし、最後まで一言ずつ貴重なご意見をお話しいただいたことに、心より感謝申し上げる。
- 私自身としては特段付け加えることはないが、皆様から頂戴したご意見をもとに、未完成ではあるものの、報告書という形にまとめることができたことを大きな喜びと感じている。
- 私は大阪で育ち、大阪で教育を受け、現在は教育に携わる立場となったが、その経験を通じて、大阪には多様な人々を尊重し、さまざまな人と関わり合いながら学び、課題を解決していくという良き伝統が根付いていると感じている。
- こうした教育を支えてきたのは大阪の教育行政の積み重ねでもあったと考えており、今回提案させていただいた内容についても、教育行政や教育委員会において十分な議論がなされ、新たな夢のある取り組みとして実現されることを心から願っている。

#### (2) 閉会

- 大阪府教育委員会 水野教育長挨拶
- 閉会